『説経才学抄』の荘厳説話

――幡・宝蓋・花鬘を中心に――

藤井佐美

はじめに

真福寺蔵『説経才学抄』は鎌倉末期に成立した説教台本と推測され、その内の巻五（全四十九項目）は、唱導における話題や展開を知り得る稀少な手掛かりとなっている。無論、仏事法要等で説教をおこなう学僧達の姿は、古記録・説話・物語・随筆類にも確認できるが、具体的な内容や語りの場に託された意味については判然としない。

これまで、仏道修行を促す構成、『澄憲作文集』を含む天台教学との関わり、『三宝感応要略録』や『注好選』のような説話集の引用方法、巻五冒頭に記された堂舎説話と異質な筆録などを通して、それぞれの話題にふさわしい情報が周到に準備されていた説教唱導の一端を明らかにしてきた。[1] 本稿では、この堂舎を取り巻く荘厳（しょうごん）の世界に求められた唱導の意義を、経論注疏類と説話の構成から見てゆくこととする。

一　幡を説く方法

本書第三項目は、「幡　付　宝蓋　花鬘」という三つの話題で構成されている。これは仏道修行の場であり、唱導の場でもあった第一「堂舎」と第二「塔」を引き継ぐ項目で、この後に第四「鐘」、第五「仁王」、第六「温室」、第七「僧坊」が続くことで分かるように、その話題は聖なる領域を徐々に説明してゆく展開である。すなわち、寺院という場を起点とし、視線も外から内へと移動させている。幡は、前二つの「堂」「塔」の存在を知らしめるための重要な仏具であり、仏教における荘厳世界を象徴する要素であった。

そこで、まずは本項目冒頭で幡の意味を経論注疏類から説こうする点に注目してみる。なお、本文は標題的記述の集合体であるため、便宜的にアルファベットで区分して示す。[2]

〈経論釈処〉

A　百縁経云、造幡奉仏功徳三世諸仏共湧出不可説尽。何者此幡随風靡、其方地獄衆生勝苦令生浄土　文

B　福宝蔵経云、幡十功徳、一所生長寿、二所生端正、三所生无病、四不受女身、五不受邪見、六不受貧賤、七不受悪心、八諸仏護念、九所護善神、十仏菩提記　文

C　塔名功徳聚一、幢号ス与願印功徳聚一。則ヒルサナ万徳之所集成、与願印則宝生地蔵之三昧身。是故建塔幢徳无尽。近作人天王、遠為法界帝　文

D　増一阿含経十三云、若入大戦中時、設有畏懼之心者、観高広幢者、便无畏怖　取意

E　普広経云、若四輩男女、若臨終時、若已過命於其亡日、造作黄幡、懸着刹上、便獲福徳、離八難苦、得生十方諸仏浄土。幡蓋供養、随心

所願至成菩提、随風飄転砕成微、随其塵数天人中生反為王受福快楽、不堕悪趣、而当証得无上菩提 文

F　百縁経云、波加多比丘昔以一幡係塔上故、九十一劫不堕悪道、値釈迦得三明六通一。

G　三昧経云、以一幡進三宝、五百劫不堕三悪道、値四千仏授菩提記、得輪王位 文

H　阿含経云、善化王以幡牒□仏之塔上係、生々世々頂上自然至七宝 文

I　幡ノ引縄ハ文殊師利菩薩、幡ハ多宝仏ナリ。是檐横木ハ妙見菩薩、鬼頭ハ弥勒菩薩、其中ノ縄ハ龍樹菩薩、左方ノ小幡ハ観世音菩薩、右方ノ小幡勢至菩薩、衣笠ハ普賢菩薩、角幡ハ薬王菩薩日光菩薩也云々

J　法定法住ノ錦ノ幡ヲ懸ケ提婆達多之五層ノ塔ニ、難解難入之暁月ハ、照ス憍梵波提之三昧機ヲ一。

（四五八頁～四五九頁）

幡は我が国で「波多」と呼び、荘厳のため仏殿の柱や天蓋等に掛け、法会を行う庭や行道をする両側に立てる物である。[3] 寺院の荘厳には欠かせない仏具であり、塔に掛けられたことにより法会の実施を広く外部へ知らせることとなる。本項目は直前に「塔」の功徳を踏まえ、遠く棚引く幡を見る功徳を幡の種類と比喩を交えながら展開させている。

まずAでは、幡を造り仏に奉納する功徳の甚大さと、それが靡く方向に地獄の衆生が居ると、その者達さえも浄土に生まれ変わることができると説く。なお、『大正新脩大蔵経』所収『撰集百縁経』に同文的一致本文は見えない。またBでも、『福（雑ヵ）宝蔵経』から幡の十種功徳と、悟りを象徴する仏の予言「授記」を得ることができるとも説く。[4]

続くCでは塔を功徳聚、幢を与願印と名付ける。余すところなく功徳を具えている点から塔を「功徳聚」と称し、万徳の集成を標識する物であると説き明かす。幢は竜や宝珠などを上端に付け、竿に吊して堂内の柱に掛けるハタホコであり、法門の象徴として儀式に用いられる荘厳具である。その幢を「与願印」、つまり衆生の念願を授与する物とし、宝生如来と地蔵菩薩による無量の功徳や衆生の利益につながることを明かす。そして、塔と幢を立てる者の功徳を転輪王や仏につながるものと説く。書中出典は明かされないが、同内容は『性霊集』九「奉レ造二東寺ノ塔一ヲ材木ヲ曳キ運フ勧進ノ表」からの引用である。[5]

このように、AからCで奉納の功徳と幡自体の意味を明かした後は、より具体的に幡を見ることや掛けることの意義を説いてゆく。すなわちDは『増一阿含経』巻第十四・高幢品第二十四之一を引用し、大戦中に恐怖心を覚えた場合は大きな幢を見ることで畏縮することが無くなると説明する。[6] なお、仁和寺行遍の『参語集』幡事に、[7]

是れ諸仏の三昧耶破シテ二諸魔軍一ヲ、令レ入ラ二正道一ニ也。譬へば如下シ世間ノ合戦ノ時、随二ヒテ旗ノ靡一ニ知ルガ中所趣上ヲ。彼の世間所用の旗は鬼形也。仏法の幡は是れ菩薩随二ヒテ飄動一ニ仏道に令レ入ラ也。

と説明する点などからは、AとDの話題上の結びつきが指摘できる。またEでは、臨終に際し黄幡を「刹上」、すなわち塔に掛けると福徳を得て浄土に生まれるとする。[8] さらに幡蓋の供養は菩提へとつながり、風が漂うに随い細かくなると、その塵と同じ数の天人が居る世界に王として生まれ変わり、福徳や快楽を受け悟りも保証されると説く。なお、「幡蓋」とは幡と天蓋を総称し、本項目内の後半に付記される「宝蓋」へと結びついてゆく。本話の類似内容は、釈迦と普広菩薩の問答や因縁が説かれる『灌頂経』第十一（『随願往生十方浄土教』）や、『言泉集』忌日帖にも「灌頂経第十一云」として同文的引用が見えるが、むしろ『法苑珠林』巻三十六「懸幡篇」の、[9]

又普広経云。若四輩男女。若臨終時若已過命。於其亡日。造作黄幡懸著刹上。使獲福徳離八難苦。得生十方諸仏浄土。幡蓋供養随心所願。至成菩提。幡随風転破砕都盡至成微塵幡一転時転輪王位。乃至

吹塵小王之位。其報無量。

に近いことからも、当該本文が『普広経』から直接ではなく、むしろ『法苑珠林』からの引用と推測することができる。

そして、臨終時の話題を踏まえた後のF「波加多比丘説話」により、幡を塔に掛けたことで、九十一劫という長い間地獄に堕ちず智慧と神通力を得た例証を示す。本話はAと同じく『撰集百縁経』巻第七・七〇「布施仏幡縁」[10]、

仏在迦毘羅衛国尼拘陀樹下。時彼城中。有一長者。財宝無量。不可称計。選択族望。娉以為婦。作諸音楽。以娯楽之。其婦懐妊足満十月。生一男児端政殊妙。與衆超絶初生之日。虚空中有大幡蓋。遍覆城上。時諸人衆。因為立字。名波多迦。年漸長大。将諸親友。出城遊戯。到尼拘陀樹下。見仏世尊。三十二相。八十種好。光明普曜。如百千日。心懐歓喜。前礼仏足。却住一面仏即為其説四諦法心開意解。得須陀洹果。帰辞父母。求索入道。父母愛念。不能違逆。将詣仏所。求索出家。仏即告言善来比丘。鬚髪自落。法服著身。便成沙門。精懃修習。得阿羅漢果。三明六通。具八解脱。諸天世人。所見敬仰。時諸比丘。見是事已。而白仏言。世尊。今此波多迦比丘。宿殖何福。生便端政與衆超絶。又於空中。有大幡蓋。遍覆城上。復値世尊。出家得道。爾時世尊。告諸比丘。汝等諦聴。吾当為汝分別解説。乃往過去九十一劫。波羅㮈国。有仏出世。号毘婆尸。教化周訖。遷神涅槃。爾時有王。名槃頭末帝。収取舎利。造四宝塔。高一由旬。而供養之。時有一人。施設大会。供養訖竟。作一長幡。懸著塔上。発願而去。縁是功徳。九十一劫。不堕地獄畜生餓鬼。天上人中。当有幡蓋。覆蔭其上。受天快楽。乃至今者。遭値於我。出家得道。仏告諸比丘。欲知彼時作幡者。今此波多迦比丘是。爾時諸比丘。聞仏所説。歓喜奉行。

からの取意とするが、それによると「波加多」は幡の音写Pataka に結びつく「波多迦」が正しい名前と言えよう。つまり、幡の名前を持つ比丘の話から幡の功徳を具体的に示している訳であるが、何よりEに引き続き『法苑珠林』巻三十六「懸幡篇」にも「又百縁経云」として同文的内容が確認でき、EとFが纏まった形で『法苑珠林』より引用された説話であることが分かる。また、続くGでも『三昧経』からの引用として、三宝への幡の奉献が悟りにつながり、転輪聖王の位にも結びつくとし、[11]Hでは幡を仏塔の上に掛けた善化王が生まれ変わっても王になったとする。[12]

そして、以上の要約的説話内容で奉献の功徳を確認した後に、改めて本格的な教義側からの説明が示される。つまり、Iで幡の各部位、引縄・檐の横木・鬼頭・その中の縄・左方の小幡・右方の小幡・衣笠（天蓋）・角幡を諸菩薩であるという解釈を披露し、[13]さらにJでは、真如の理を意味する美しい幡を塔に掛けることが提婆達多や憍梵波提に象徴される邪心をも静める機縁につながると教義的内容を説くのである。[14]

経論注疏にもとづきながら幡の奉献を促す内容ではあるが、その功徳を例証から詳細に説明することで、それを掛ける堂舎と塔の存在意義をより確かなものへと導いてゆく。つまり、荘厳に象徴される仏教世界を説く上で、本項目は直前の二項目と隣接するにふさわしい内容であったことが分かる。

二　幡の唱導説話

では、以上の功徳を唱導僧が説いたであろう譬喩因縁の話題から見てゆくこととする。

〈因縁所〉

K　天竺波羅提国ノ木刃寺ニハ、一流ノ幡ヲ係テ終ニ至ル菩提ニ。月代国ノ解脱生死寺ニハ、一流幡ヲ捧テ遂タリ西方ノ往生ヲ一文

L　昔天竺ニ有一人猟師一、妻ハ道心アリ、夫ハ制止ス仏道ニ不可趣一云々　妻密ニ幡一流□イテ筥ニ入テ、夫出ツレハ懸之ヲ一　奉礼一、夫来レハ取隠ス。年来過クル程ニ、夫弓箭ヲ捨テ俄走シ来ル。妻ハ驚テ出テ見レハ、大鬼王追テ来ル也。此鬼王猟師ノ妻ヲ見テ逃ケ返ル。其故ハ何ニト尋レハ、此鬼王云、猟師ノ妻ヲ見レハ左右前後ニハ梵王帝釈四大天王囲遶シテ、頂上ニハ諸仏菩薩光放テ坐スト見レハ、我諸仏菩薩聖衆ノ坐ス所ヘ害心ヲ思テ来テケルヨト思テ逃候ト云。仍幡ノ功徳不可思議也。（四五九頁）

まずKでは、幡を掛けて菩提に至った波羅提国木刃寺の人と、幡を奉納して西方往生へ至った月代国解脱生死寺の人を紹介する。「波羅提国」と「木刃寺」は戒律が記された本を意味する「波羅提木叉」に依拠する名称であろうが、標題的説話内容は幡の功徳を確実に示している。[15] また、Lでは不信心な猟師と信心深い妻が対比して説かれる。妻は夫の外出時に幡を掛け礼拝し、帰宅時には幡を隠す生活をしていたが、ある日のこと夫が弓矢を捨て鬼王に追われながら帰宅したところ、鬼王は妻を見た途端逃げ去った。その理由として、梵天・帝釈・四天王が妻を取り巻き、頭上に仏の光が満ちていたことで仏界に来てしまったと鬼王が勘違いをして逃げたと説明し、幡の功徳を説くのである。[16]

唱導の理想的展開と推測する三国の例証、すなわち天竺・震旦・本朝という構成はここにはなく、いずれも天竺の説話でまとめられている。あるいは、経論釈処で繰り返し示された功徳や経意を一層具体的に示しており、それは実際の説教唱導における演変を顕著に反映している箇所とも言えよう。例証の数は他項目に比べて少なく簡潔であるが、それだけに多くの例証を残している点で対照的な直前項目「塔」との連関が推測できるのである。

三　堂内の荘厳

堂塔を外側から説いた後、荘厳に対する視線はさらに堂内へと移る。本項目は引き続き、宝蓋や華鬘についても経論注疏から説明を試みている。

〈宝蓋〉

M　十輪経疏云、仏住菴羅林、五百童子各持宝蓋奉献。如来即文神力成一、大蓋遍覆三千大千世界文

〈花鬘〉

N　雑宝蔵経云、我昔以花鬘奉迦葉仏塔、今生於天上獲是勝功徳、在於天中報得金色身一文　（四五九頁～四六〇頁）

まず、Mでは宝蓋（天蓋）、すなわち仏像や礼盤の上に瓔珞を垂らす天蓋に込められた力と奉献の重要性を示すために、『十輪経疏』から五百童子による宝蓋の奉献と、そこに集まる神仏の力の大きさを説く。[17] また、Nでは花鬘、すなわち仏殿の内陣や欄間の荘厳として柱間に懸け吊られた仏具の功徳を説く。[18] 仏塔に花鬘を奉納したことで天上界に生まれ、神々の中でも金色身を得たとする釈迦の話は、『雑宝蔵経』巻第五之五十一「天女本以華鬘供養迦葉仏塔縁」の偈に相当する。[19] そして、この花鬘を幡と共に堂内に飾ることについては、時代が下るが『塵添壒嚢鈔』巻第十五の四「道場ニ懸二幡花鬘一事」に荘厳の功徳が説かれており、[20]

専ラ以二幡花鬘一堂内ノ厳トス何故ソ。又幡ヲハ。用二兵具一其差別アリヤ。夫レ花鬘ト者。人天頭首ノ厳リ也。而ニ今仏堂ヲ為二无上之首一故ニ。以二花鬘一荘レ之也。又於レ幡有二二種ノ異一。一ニハ人頭兵具ノ幡ヲハ。名二鬼形ノ幡一。幡ノ面ニ畫二鬼面一図二神形等一。或ハ立二船中一。諸方ノ風ヲ知リ。或ハ兵衆ノ前ニ捧テ。戦場ノ進退ヲ測ル也。二ニ者仏法ノ幡ヲ名二菩薩形ノ幡一。定恵ノ手アリ。四

波羅密ノ足アリ。三身ノ坪アリ。三角ノ智形アリ。是ヲ堂中ニ係ル。随レ聳人皆入二仏道一功徳アリ。サレハ大国ノ法ニ。高懸二幡ノ足一。人ノ頭ノ上ニ。サハル程ニシテ。其ノ下ヲ通ル者ハ。幡頭ニアタレハ。其人ノ罪障ノ滅スル得益アル也。是ヲ灌頂ト云也。二字共ニ平聲ニヨム。密宗ノ入壇ヲハ灌頂ト云。上ヲ去聲。下ヲ上聲ニ云也。今ノ灌頂モ。旒頭ニアタル故ヘニ。頂ニ灌クト云名アル也。又下臈ノ小屋竝ニ里閭ノ巷ニ縄ニ樒ヲ。クヽリサケテ。灌頂ト云モ。模レ之ナルヘシ。彼ノ下ヲ通ル者カ白業分ニ預カルヘシ。サレハ幡ヲ壁ノ間ニ不レ係云モ壁ノ間ニハ。人ノ出入无ケレハ。得益空シカルヘキ故ニ。略シテ不レ懸云云。又兵具ノ旗。或ハ二手二足アリ。人形ノ旗共云。仏ノ幡ニハ。相違ヘル者也。

戦中に掲げることの意義を説くDとの結びつきも指摘できよう。そして、頭に触れると滅罪が叶うという灌頂幡の側から見ると、それはさらに空海の『秘蔵記』第五十九「世人皆以レ幡ヲ号ス二灌頂一ト。是レ以テ幡ノ功徳ヲ。先ッ為レ輪王一ト後ニ終ニ成レリ仏ト。」とも、あるいは『秘蔵抄』第五十三灌頂ノ事「以レ幡ヲ名ク二灌頂一ト也。此ノ灌頂ヲカクル處ハ鬼神不二来入一。」との関わりから見た場合、Lの説話とも結びつくことに気づく。[21] ただ、『説経才学抄』の本項目は灌頂幡に限定されるものではない。すなわち、多種多様な幡は堂舎内外にも及ぶ荘厳具であるだけに、それぞれの幡への説明対応が可能な範囲の教義と説話が話題として選ばれていたのである。以下、写真は藤井撮影による。

〈花鬘〉

〈宝蓋〉

〈幢幡〉

おわりに

空間としての寺院を見ると、そこには様々な建築物、仏像、法具、仏具、聖教があり、僧侶達の衣裳、持ち物など、それらすべてが仏教を象徴する荘厳の内にある。そして、荘厳に支えられた空間こそ法会や儀礼、修法や勤行などの場であった。

本項目は直前項目の「堂舎」「塔」、つまり寺院空間の中でも外観維持を促す項目を踏まえ、徐々に視線を堂内へと導く。特に、三種類の荘厳具が話題とされたことには理由があった。幡については、塔に掛ける功徳を経論注疏や因縁処で説いているが、そこからさらに外陣や内陣にも飾られる多様な形態の幡へと話題は及ぶ。説草には堂内の幡に到るまで広く話題が及んでおり、最終的には内陣に飾られる幡に集約されてゆく。

内陣には、本尊に向けられ様々な仏具が見えるが、その中でも一際華やかな荘厳具が幢幡、宝蓋、花鬘である。これらの装飾が堂塔全体を聖なる空間に仕立て上げるのであって、本項目の存在理由もそこにある。堂内の構造において、内陣は仏国土を具現化した場所であり、人々の理想とする場所であった。荘厳の説明は仏教世界を説くことにつながる。逆に、仏教世界を説く上で荘厳の説明は欠かせない内容とも言えよう。勧進唱導は堂塔の建立や修理に限られるものではなく、これらの仏具も不可欠な物として求められたはずである。幡、宝蓋、花鬘は他の荘厳具以上にきらびやかな物であり、荘厳の説明はそれ自体が視覚的効果を持つ特別な唱導にもなり得たのである。その説明は内陣という空間に支えられているだけに、人々と仏の距離を一層近づけたに違いない。

注

① 小著『真言系唱導説話の研究―付・翻刻　仁和寺所蔵『真言宗打聞集』』（二〇〇八年、三弥井書店）。拙稿「『説経才学抄』堂舎の説話――建立から修理へ――」（伝承文学研究会編『伝承文学研究』第六十一号、二〇一二年、三弥井書店）

② テキストは真福寺善本叢刊第三巻『説経才学抄』（国文学研究資料館編、一九九九年、臨川書店）山崎誠翻刻本文を引用したが、一部修正した箇所もある。

③ 幡は素材・形状・用途も様々で荘厳具としては古くから用いられている。玉幡・平旗・糸旗・五色幡・幢幡・庭幡・禮堂旗・天蓋幡・仏法幡・施餓鬼幡・灌頂幡・葬送幡などがある。

④ 『福宝蔵経』あるいは『雑宝蔵経』の出典未詳。なお、『仏為首迦長者説業報差別経』（『大正新脩大蔵経』第一巻所収）には「若有衆生。奉施絵幡。得十種功徳。」が説かれる。

⑤ 『遍照発揮性霊集』（『弘法大師全集』第三輯所収、一九六五年、密教文化研究所）。「ヒルサナ」は毘盧遮那（びるしゃな）。華厳経および大日経・金剛頂経その他の密教の教主としての仏の名前で、日本密教では「光明遍照」と訳し「大日如来」を指す。「宝生」は望みをかなえる与願印を結ぶ図像を持つ「宝生如来」で、教義的には胎蔵五仏の開敷華王如来と同体とする南方の如来を指す。「三昧耶形」（三摩耶形）は一切衆生を済度するため諸仏の発した誓願を具象化したもので、仏・菩薩・明王・諸天などが手に持っている器仗または印契。

⑥ 『増一阿含経』巻第十四高幢品第二十四之一「卿等若入大戦中時。設有恐怖畏懼之心者。汝等還一顧視我高広之幢。設見我幢者便無畏怖。」（『大正新脩大蔵経』第二巻所収）

⑦ 『参語集』（鷲尾順敬編『国文東方仏教叢書』随筆部、一九二六年、国文東方仏教叢書刊行会）は仁和寺菩提院行遍の口伝秘説を輯録した内容。五巻三〇五項目に及ぶ行者が知っておくべき基礎知識が説かれており、阿闍梨間に写伝されたと考えられる。

⑧ 刹は柱・寺・塔の意で、本書第四十八項目「追福」では「ハタホコ」と読ませる。

⑨ 『普広経』からの引用本文に相当する『灌頂経』巻第十一は「普広菩薩白仏言。世尊若四輩男女。若臨終時若已過命。是其亡日我今亦勧。造作黄

幡懸著刹上。幡蓋供養随心所願至成菩提。幡随風転。破砕都盡至成微塵。風吹幡塵其福無量。幡一転時転輪王位。乃至吹塵小王之位。其報無量。」（『大正新脩大蔵経』第二十一巻所収）とし、『言泉集』忌日帖（永井義憲・清水宥聖編『安居院唱導集』上巻所収、貴重古典籍叢刊六、一九七二年、角川書店）でも「灌頂経第十一云」として引く。なお、『法苑珠林』第三十六（『大正新脩大蔵経』第五十三巻所収）には、「黄幡」に関して、「述曰。何故経中為亡人造黄幡。掛於刹塔之上者。答云。雖未見聖解可以義求。此五大色中黄色居中。用表忠誠。引生中陰不之邊趣冀生中国也。又黄色像金鬼神冥道将為金用故。解祠之時剪白紙銭鬼得白銭用。剪黄紙銭得金銭用。故譬喩経曰。時有穀賊盗主人穀盡。主人捉得責言。汝何以盗我穀盡。汝是何神。穀賊言。将我至路有人知我名道逢黄馬車乗衣服皆黄。黄衣人間云。穀賊汝何在此。主人方知是穀賊。主人又問云。乗馬黄衣是誰。穀賊言。是黄金之精。以報主人食粟之直。主人因此得金用不可盡也。良由人鬼趣殊感見各別故。聖制黄幡為其亡人。掛之刹塔令尋之得宝救済亡霊也。」の注記がある。

⑩ 『撰集百縁経』巻第七・七〇「布施仏幡縁」（『大正新脩大蔵経』第四巻所収）

⑪ 『観仏三昧海経』巻十に幡を含む荘厳に関する記述は見えるが、該当箇所未詳。

⑫ 「善化王」は「善化楽天王」などの表記も見えるが未詳。「牒□仏」は「辟支仏」か。『阿含経』出典未詳。

⑬ 出典未詳。部位の説明は注⑦『参語集』幡事にも含まれているが、仏菩薩を配置する解釈とは異なる。

⑭ 「法定」は真如の理を指す。『法華経』方便品の偈には「法住法位」の用語などが見える。「提婆達多」は釈尊に随って出家をするが、釈尊を妬み悉く敵対して三逆罪（出仏身血・殺阿羅漢・破和合僧）を犯した人物。「難解難入」は教えが理解しがたく、入り難いことを指す。「憍梵波提」は舎利弗の弟子で、第一次結集時に迦葉の要請に応じず種々の神変を現じた人物。本書第三十三項目「持斎」では、偸盗により牛に生まれ変わった内容が記されている。

⑮ 出典該当箇所未詳。「波羅提木叉」については、本書第三十四項目「持戒」に「波羅提木叉ハ、苦海船筏、長夜之灯、長生之秘術、不死妙薬也」と説明する。

⑯ 「囲遶」は周囲を取り巻くことで、敬意の意味も含まれる表現。出典該当箇所未詳。

⑰ 宝蓋は天蓋、傘蓋などと称する荘厳具。円形・方形・六角形・八角形などがあり、その下べりに瓔珞を垂らし、仏の上や大壇などを覆うもの、修法者を覆うもの、灌頂の修習や野外法会に使用するものなど多種。『法華義疏』四之第十九、常不軽菩薩品「現三瓔珞反成二宝蓋一」（『大正新脩大蔵経』第五十六巻所収）。『十輪経疏』出典該当箇所未詳。なお、注④『仏為首迦長者説業報差別経』には「若有衆生。奉施宝蓋。得十種功徳。」と具体的な功徳が説かれている。

⑱ 華鬘は糸で生花を綴り結び、仏にも供養する花飾り、装飾品を指す。我が国では牛皮・銅・木・ガラス玉などが生花の代わりとされ、花の文様を主とする堂内の荘厳具。

⑲ 『雑宝蔵経』（『大正新脩大蔵経』第四巻所収）。「迦葉仏」（摩訶迦葉、大迦葉）は、仏十大弟子の一人で、頭陀（衣食住に関して小欲知足に徹した修行）第一と言われた。釈尊の死後、教えの結集を開き、多くの経典や戒律テキストが成立した。

⑳ 『塵添壒嚢鈔』（『大日本仏教全書』所収、一九一三年、仏書刊行会）

㉑ 空海『秘蔵記』（『真言宗全書』第九巻所収）。『秘蔵抄』（同上所収）。成尊の『徒師灌頂決義鈔』第一（『真言宗全書』第二十七巻）には法会における幡蓋に関する問答が見え、興然の『五十巻鈔』巻第十二（『真言宗全書』巻第二十九巻）には天蓋・幡・幢幡についても詳細な記録が残されている。

（尾道市立大学准教授）